

グローバル人材になろう

偏見を持たず
思い切って話す

早稲田大学国際教養学部長
A・ピニングトン氏

1955年英スラウ生まれ。82年英サセックス大学院で英文学博士取得。専門は英米文学と日本文学、比較文学。88年早稲田大学講師となり、2004年の国際教養学部立ち上げにかかわる。14年から現職。60歳。



社会という海原にこぎ出し、目標に向かって進むには何をどう学べばいいのか——。昔も今も、若い世代が抱く問いのひとつでしょう。若者に限らず、世界中の人々と渡り合うにはコミュニケーション能力や開かれた思考などが求められそうです。早稲田大学国際教養学部長として課題に取り組むエイドリアン・ピニングトン氏に聞きました。(聞き手はNAR編集部次長 遠西俊洋)

——真のグローバル人材を育成するには、どのような教育が必要ですか。

「我々が教えている国際教養学部は名の通り、国際と教養の要素があります。まず、英語による授業を採用しています。ただ英語を覚えるために使っているわけではありません。英語を共通語として使い、異なる文化の学生と一緒に学ぶためです」

「受け身の授業スタイルではなかなか前に進まないのので、参加型の教育を重視しています。1年次からの少人数の演習では、学生中心にプレゼンテーションをしたり、議論したりします」

「教養学部としてあらゆる科目を網羅しています。最初は学生がどんな分野に関心を持っているか、みつけてもらいます。日本語を母国語にしている学生は必修として1年間留学します。入学時は留学生と帰国生、日本語が母国語の学生の間で英語力の差があっても、ほぼ解消していきます」

——学生は学部で学んだ後、どのような道に進むのですか。

「7割程度は就職して残りは大学院、うち約半分は欧米に渡ります。企業側からは卒業生がプレゼンテーションに強く、質問の仕方もいいと評価されています。英語圏以外の国に留学した場合、合計3つの言葉で意思疎通が図れるようになるのも就職には強いです」

「大学院に進む中には、米ハーバード大や英オックスフォード大などに入る学生もいます。言語力だけではハーバードに入れないです。積極的に自分から調べ、研究し、独創的に学んだ結果です。学部で在学中、法律に関心を持ち、国内外のロースクールを選ぶような学生も出てます」

“異論も敵視せず理解を”

——学ぶ側として、大切な姿勢は何ですか。

「やはり偏見を持たないことだと思います。誰でも本能に近い部分として、自分の常識と違うことを言われると拒否感が起きます。私だって偏見は抱きがちですが、人と人の共通点は必ずあります。相手の話を最後まで聞き、敵視せず理解しようとするのです」

「私は英国人として、日本語を学びました。最初は片言しか話せなくて恥ずかしく、苦労しました。そのうち失敗しても気にせず、思い切って話すしかないとわかりました。日本文学好きという学ぶ動機があったのも良かったのでしょうか。読み書きなどに力を入れ、人として少し謙虚にもなれました」

「言葉というのは自分よりうまい人は必ずいます。発言しているうちに、恥ずかしい思いをしているのは自分だけではないとわかれば克服できます。日本語が母国語の学生でも、学年が上がるにつれ、積極的に発言するようになるのは素晴らしいと思います」

——伝えたいことがあれば、文法などは二の次でいいのですか。

「文法はどうでもいいという発想はあまり良くないでしょう。話すことと読み書きの向上を、いい循環にする必要があります。やはりあきらめないことが大切です。私は今でも毎日、1時間程度は日本語の本を読み、今まで見たことのない言葉を発見しています」

「英語を使って、ほかのことを学ぶのが重要です。付加価値の高いことを大変と感じるのは、いいことだと思います。若い人は少し無理したほうがいいでしょう。野心を高めてほしいです」

“地域情報の掘り起こし 重要”

——アジアの情報を英語で伝える Nikkei Asian Reviewのようなメディアをどう活用しますか。

「東南アジア諸国連合(ASEAN)など、今まで必ずしも十分でなかったとされる地域の情報を掘り起こそうという試みは、国際教養学部の動きと似ていると思います。我々も幅広い対象を、ニーズの異なる人にいかに伝えるかを考えています。世界中で使う英語で発信することは重要です」

「国際教養学部ではありますが、学生が最も関心を持つ分野は経済やビジネスのようです。3、4年生になると就職を意識するようにもなります。授業の材料として、情報入手の手段として役立てたいと思っています」

グローバル人材になろう

偏見を持たず
思い切って話す

早稲田大学国際教養学部長
A・ピニングトン氏

1955年英スラウ生まれ。82年英サセックス大学院で英文学博士取得、専門は英米文学と日本文学、比較文学。88年早大法学部講師となり、2004年の国際教養学部立ち上げにかかわる。14年から現職。60歳。



【図・写真】英語が飛び交う早大国際教養学部の授業

同プログラムに選ばれ、タイのタマサート大学に留学中の政治経済学部経済学科2年の河越泰希さん（20）は「インターンとしてデジタルマーケティング会社で働くなど、発展ぶりを自分の中に焼き付けている。将来は東南アジアを舞台に働きたいという考えが強まった」とのことです。早大では同プログラムにかかわる学生や教員向けにNikkei Asian ReviewにアクセスできるIDを提供、情報取得などに活用しています。

2015年10月26日 日本経済新聞・朝刊 27面 掲載
無断複製転載を禁じます。

早稲田大学国際教養学部は2004年度に発足した比較的新しい学部で、4学年で国内外の約3000人が学びます。入学から卒業までほぼ全ての授業を英語で実施。あえて専門に特化しない教育を進める一方、1年次から演習を設け、教員1人に学生20人が基本の少人数教育でプレゼンテーション能力を高めるのが特色です。

「イギリスのフィクション」の演習を受ける2年の池上品さん（19）は「3、4年に向け、国際関係など自分のやりたいことを絞っていきたい」と身を乗り出して話します。コフロン花香さん（19）は「英語と日本語を使い、最終的には生まれ育った米国で働いてみたい」そうです。H・G・ウェルズのSF小説「宇宙戦争」を題材に演習を担当するロー・グレアム教授は「留学生と帰国生、日本の教育を受けた学生が意見をぶつけ合うことに意味がある」と強調します。

早大は13年度から、国際教養学部が主体となり、東南アジア諸国連合（ASEAN）の有力6大学と結び「AIMS7多言語・多文化共生プログラム」を実施しています。AIMSはASEAN International Mobility for Students Programmeの略で、文部科学省の採択事業です。

毎年度ASEANから25人の学生を受け入れ、同数を現地に送り出します。現地では秋学期に学び、学費無料や航空券支給といった支援を受けられます。母国語と英語、現地語を使い異文化での対話能力を身につけ、国際社会での橋渡し役になることを目指しています。